4/14/2017

日本・アジアのキリスト教――無教会キリスト教の系譜（7）

芦名定道

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、年度や学期を超えて、無教会キリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされている。今年度前期は、昨年に引き続き、無教会キリスト教における内村鑑三の後継者の一人である、南原繁のテキストを読み進める。

＜演習のスケジュールと場所＞

演習日（前期・金２）：4/14, 21, 28, 5/12, 19, 26, 6/2, 9. 16, 23, 30, 7/7, 14, 21

場所：キリスト教学研究室

・初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。二回目以降は、南原繁『自由と国家の理念』（著作集第三巻、岩波書店）に収録の諸論考を、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

・4/14：オリエンテーション＋「昨年度のまとめ１」（本日）

・4/21：「昨年度のまとめ２」＋担当者確定。

・演習は 4/28 より開始。

・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。

・必要な解説を行う（芦名）。

・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

＜テキスト＞

・南原繁『自由と国家の理念』（著作集第三巻、岩波書店）

＜南原繁の略歴的説明＞　（『岩波キリスト教辞典』の項目・田中光三）

・1889-1974。香川県生まれ。

・政治学者、無教会キリスト者。

・旧制第一高等学校を経て東京帝国大学卒（1914）、一高在学中に新渡戸稲造の感化、内村鑑三聖書研究会連なる。内務省を経て、1921 年に東京帝国大学法学部に転職。ヨーロッパ在外研究を終え教授（1925 年）。

・政治学史、政治学を担当。

・『国家と宗教』（1942年）。国家の本質を闡明することを通して、デモーニッシュなナチズムと日本のファシズムを批判。

・法学部長（1945 年）を経て東京大学総長に就任（1945-51 年）。日本学院院長（1969 年）。

・『フィヒテの政治哲学』（1959）、『政治理論史』（1959）、『政治哲学序説』（1973 年）。

・歌集『形相』（1948 年）。

・著作

『南原繁著作集』全10巻、岩波書店。

・Richard H. Minear（edited and translated）, *War and Conscience in Japan. Nambara Shigeru and the Asia-Pacific War*, University of Tokyo Press, 2011.

＜研究文献＞
・南原繁研究会：http://nanbara.sakura.ne.jp/
　研究会編論集（to be　シリーズ。EDITEX）
・山口周三『資料で読み解く　南原繁と戦後教育改革』（東信堂、2009年）、
　　『南原繁の生涯　信仰・思想・業績』（教文館、2012年）。
・下畠知志『南原繁の共同体論』（論創社、2013年）。

＜演習の背景・経緯＞
・日本・アジアのキリスト教研究に向けて
　①東北アジア（朝鮮半島・日本・中国・台湾）のキリスト教
　②宣教師サイドからの視点との統合
　③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
　④アジアの固有の課題とキリスト教（アジアの近代史のコンテキストにおいて）
　⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
　⑥共同研究の実施

・日本キリスト教思想研究：近代日本とキリスト教思想との相互連関を中心に
　１．2001 年度の矢内原忠雄、2002 年度の内村鑑三に続いて
　２．近代日本（天皇制・民族主義）とキリスト教
　３．明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
　　新神学論争、植村・海老名論争
　４．2005 年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学（学問的キリスト教思想）の系譜
　　とくに、2006, 2007 年度は、植村正久とその思想的展開（高倉徳太郎）
　５．2008 年度から 2012 年度まで、波多野精一。
　６．2013 年度から、無教会キリスト教。

・研究会との相互関係：研究拠点の形成に向けて
　「アジア・キリスト教・多元性」研究会
　　https://sites.google.com/site/asiachristianity/
　　『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第 15 号。
　　『比較宗教学への招待－東アジアの視点から－』晃洋書房　2006 年

＜日本キリスト教史の現状＞
①通史の試み
②個別教派・教団・教会の歴史編纂
③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
④人物研究（内村、新島、海老名、新渡戸、植村など）
⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備
　全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。
　土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

＜文献＞
　より包括的な文献表としては、http://tillich.web.fc2.com/sub9.htm、http://tillich.web.fc2.com/sub9a1.htm を参照。
Barrett, Kurian, Johnson（eds.）, *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition

Oxford University Press 2001
Scott W.Sunquist（ed.）, *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編　『アジアにおけるキリスト教比較表』（創文社）
日本基督教団出版局編　『アジア・キリスト教の歴史』（日本基督教団出版局）
富坂キリスト教センター　『鼓動する東アジアのキリスト教』（新教出版社）
鵜沼裕子　『史料による日本キリスト教史』（聖学院大学出版会）
隅谷三喜男　『日本プロテスタント史論』（新教出版社）
『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社）
出口光朔　『近代日本キリスト教の光と影』（教文館）
土肥昭夫　『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社）
『歴史の証言　日本プロテスタント・キリスト教史より』（教文館）
海老沢有道・大内三郎　『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局）
中央大学人文科学研究所　『近代日本の形成と宗教問題』（中央大学出版部）
高橋昌郎　『明治のキリスト教』（吉川弘文館）
古屋安雄・大木英夫　『日本の神学』（ヨルダン社）
武田清子　『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』（新教出版社）
古屋安雄他　『日本神学史』（ヨルダン社）
石田慶和　『日本の宗教哲学』（創文社）
マーク・R・マリンズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー）

近藤勝彦　『デモクラシーの神学思想　自由の伝統とプロテスタンティズム』（教文館）
（植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁）
佐藤敏夫『植村正久』（新教出版社）
大内三郎『植村正久　生涯と思想』（日本キリスト教団出版局）
『植村正久論考』（新教出版社）
武田清子『植村正久　その思想史的考察』（教文館）
雨宮栄一『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』（新教出版社）
崔　炳一『近代日本の改革派キリスト教―植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究―』
（花書院）
森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』（東京大学出版会）
森本あんり『アジア神学講義』（創文社）
徐正敏『日韓キリスト教関係史研究』（日本キリスト教団出版局）
柳父圀近『日本的プロテスタンティズムの政治思想――無教会における国家と宗教』
（新教出版社、2016年）
芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性』（三恵社、2016年）
柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三――その批判精神と普遍主義の展開』
（みすず書房、2016年）
近藤勝彦『キリスト教弁証学』（教文館、2016年）
第四部「新しい日本の形成の文脈におけるキリスト教の弁証」

＜昨年度のまとめ１＞

「南原繁の政治哲学とその射程」（前半）

（『日本哲学史研究』第 13 号、2017 年 3 月、京都大学文学研究科・日本哲学史専修、pp.33-58。http://www.nihontetsugaku-philosophie-japonaise.jp/?p=159）

一　問題

二十世紀は政治哲学をめぐり多くの議論が戦わされた時代であった。政治哲学は現代哲

学の主要なテーマの一つを 数えることが可能であり、そこで問われたのは、道徳から区別される政治の固有性であり、また現代の政治状況を理解し危機を乗り越える理論構築を行うことであった。この問題状況は、現在も継続中であり、日本においても事情は同様である。

「戦後教育は、どの程度『教育基本法』に従って刷新されてきたのであろうか。『教育基本法』の理念や精神は、むしろほとんどその成立後数年にして、軽視されながら今日に到ったのではないかと疑われる。今、教 育をはじめ日本の基本的体制の見直しを図るとするならば、戦後の改革に思想的、理念的に挺身した政治哲学 者にして教育者南原繁を再読することはほとんど不可避的な要件に属するのではないかと思われる。」（近藤、 二〇〇〇、四九八）

本論文の考察対象となる南原繁は、日本の政治哲学史の中で特徴的な位置を占め、太平洋戦争後の政治状況において重要な役割を果たした政治哲学者であり、また内村鑑三の弟子として無教会キリスト教信仰者であった。二十世紀の歴史的状況の中で思索した南原の政治哲学をその哲学的基礎から検討し、彼が取り組んだ諸問題について考察を行うこと、これが本論文の目的である。

南原の政治哲学を考察するために、本論文では南原の最初の著作であり、主要著作の一つである『国家と宗教――ヨーロッパの精神史の研究』（一九四二年）と翌年刊行された補論「カトリシズムとプロテスタンティズム」とを中心に分析が進められる。これは、本論文における議論から明らかになるように、『国家と宗教』は南原の最初の著 作であるにとどまらず､そこにはその後の南原の政治哲学の展開がその端緒において示されており、そこから南原の 思想全体が明確に把握できるからである。『国家と宗教』以外の著作は、必要に応じて適宜参照される。本論文では、まず南原の哲学思想の哲学的あるいは宗教的基盤を明らかにし、その上で、『国家と宗教』の意義あるいは目的を、全体主義論という視点から論じたい。なお、『国家と宗教』からの引用は、岩波文庫版から行い、頁数のみを示すこ とにする。

二　南原政治哲学の基礎

『国家と宗教』は、副題にあるように、「ヨーロッパ精神史」という視点から構想されている。そこにおいては国家論・政治思想を含む「ヨーロッパ文化」がキリスト教と古代ギリシャという根本契機によって捉えられ、これらの諸契機に注目することによってヨーロッパ精神史の理解が試みられる（三三五）。こうしたヨーロッパ精神史理解は、ヘレニズムとヘブライズムといった類型論を生み出した十九世紀の思想史研究の成果に基づくものであるが、南原は、哲学的には新カント学派、そしてキリスト教理解においては、トレルチらにその多くを依存している。こう した思想的伝統より南原が受け継いでいるのは、哲学とキリスト教思想（神学）とは、明確に区別されつつも、決し て分離される得るものではなく、むしろ両者は緊密な相互連関にあるという理解である。たとえば、南原がしばしば 言及するトレルチは、まさに哲学と神学の相互作用が展開する場に位置しており、本章で解明を試みる南原の価値並行論は、新カント学派の哲学を基盤にしつつも、同時にキリスト教思想と結びつけられているのである。

『国家と宗教』で南原は、一九二〇年代ドイツにおける新しいプラトン研究に言及しつつ、ヨーロッパ精神史をプ ラトンから論じ始める（第一章）。この新しいプラトン研究というのは、新カント学派のプラトン理解を批判しつつ登場したゲオルゲ学派に属する研究者のプラトン解釈である。南原は、このゲオルゲ学派のプラトン研究について、次の三つのポイントを指摘している。

第一に、プラトン哲学の中核として捉えられるべき問題は、認識論ではなく､『国家論』において展開された「政 治的国家の問題」である。この観点からすると、「エロス」と

は、「根本において世界と宇宙の産みの力」「国を造る生々の力」「生ける全体的国家」の紐帯であると言わねばならない。
　第二に、プラトンの国家哲学の中心を形づくるのは、哲人王である。哲人王は、人間の世界を救済すべく行為する 存在であり、政治指導者として建国の象徴と位置づけられる。「哲人こそは天と地、神と人とのあいだを媒介する半
神人のデモーニッシュな性格を具えた者」（三三）であって、「国家の規範は哲人たる主権者において具体化」（三四） される。
　そして、以上の国家哲学は、第三に「神政政治」の思想に至る。

「最高の共同体としてのイデアの世界の実現たる国家は、それ自ら人間最高の徳の世界の映像にほかならずして、 国家はまたそれ自体まさに『神の国』である。」（三六）

　これらの内容において展開されたゲオルゲ学派のプラトン解釈は「いわゆる新カント学派のプラトン観に対して、 全く新しいプラトン像」（三八）であり、プラトン哲学を国家哲学として解する点で、南原はゲオルゲ学派に一定の真理契機――政治固有の意義の認識――を認める。しかし問題は、ゲオルゲ学派のプラトン理解の第二、第三の論点 である。これらから帰結するのは、「プラトンにおける神話的要素を高調し」、「本源的な生の統一、世界の原始像と しての文化の全体的統一、神話的世界観への復帰」（四一）することだからである。これが、南原とゲオルゲ学派を 批判するポイントにほかならない。そこには、「保守的・反動的志向」が顕著であり、ナチスなどの現代の独裁政治 理論と相通じるものと評されている。

「近代国家が多くの欠陥と誤謬を内包するとはいえ、以上のような国家観をもってこれに代えることは不可能で あるのみならず､そのこと自体大なる危険を包蔵するものである。」（四六）

　このようなゲオルゲ学派批判から議論が開始され､最後に第四章「ナチス世界観と宗教」が置かれていることは、 次章で論じるように、『国家と宗教』が全体主義批判をその目標の一つとしていることを明確に示しており、この目的遂行のために南原が依拠しているのが、カント政治哲学とそれに基づく「価値並行論」なのである。これは、プラトン解釈という点に即して言えば、「カントの理解」を出発点としてプラトンを批判的に再構成するということにほかならない。

「プラトンにおけるごとき善のイデアまたはその他の一つをもって最高の絶対価値とすることなく、むしろ宗教・ 道徳および政治の各領域における文化の価値の自律とその相関関係の思想が確立されてあるのを知るのである。 かようにして、遠くプラトンの偉大な理想国家の構想がカントによって初めて批判的構想を得たものと称して過 言ではないであろう。」（一七一）

　次に、南原政治哲学の哲学的基盤といえる価値並行論へ考察を進めよう。南原の価値並行論は、新カント学派（西 南学派）のカント解釈に依拠しつつ、『フィヒテの政治哲学』（一九五九年）において展開されたものである。その内容は次の三点にまとめられる。すなわち、道徳哲学を基礎論としたカントの価値哲学、カント価値哲学の政治的価値への拡張、そして超価値としての宗教の三つである。しかし、これらの論点は『国家と宗教』においてすでに確認することが可能であり、ここでは、『国家と宗教』に基づいてその要点を検討することにしたい。
　南原は、カントの政治哲学を論じる前に、「人間」の批判という観点から、カント批判哲学の全体を概観する。南 原のカント解釈は、カント哲学を規定する、自由と自然、形

式原理と実質原理、内的と外的という一連の枠組みとそれに基づく二律背反、そしてその克服という議論の流れを明確に提示するものであり、標準的で簡潔なカント論と言える。その上で、南原は、カント哲学の中心が「道徳法則に根拠する意志の自由の主体としての人間」（一五七）で あり、それは「宗教改革が深め、かつ固めたところの個人人格思想の哲学的構成でもあった」（一五八）とまとめる。しかし、南原によれば、カント哲学は道徳哲学を基礎にしつつも、それにとどまるものではない。すなわち、「国家 および政治論」がカント哲学の必然的帰結であって、そこに「全哲学思想が完結せられる」（一六一）と解されなければならない。問題は、国家・法律論の倫理的基礎は何かということになる。このために、南原はいったんカントの宗教哲学について簡単に触れ、その後に、国家論へと向かう。

「道徳は人間行為の動機・心情・意志の内的自由の問題としてついに宗教に導き、神の国を要請するに至ったが、 他方に心情は行為において実現せられ、内的自由は外的自由を要求する。ここに『道徳の国』の原理は外的な『法 律の国』としての国家の観念へと導く。」（一六八）

この議論の展開は、カント哲学における内的と外的の関連性に基づいて、まず内的自由の事柄としての道徳が宗教 に至り、その宗教が内的と外的のいわば二重性を有することを示すものと解釈できるであろう。すなわち、南原は根本悪（自然的傾向性が行為の格率として最高の妥当を要求すること）の議論を通して、カントが道徳から宗教へと進 まざるを得ないこと、つまり、「カント全哲学体系の中心である道徳説は宗教に導く」（一六七）ことを明らかにし、 その上で、内なる「見えない教会」と歴史的な「見える教会」との区別と関連性に至るのである。まさにこの内的と 外的の対応関係こそが、南原がカントにおいて道徳から政治へとカントの論理（内外相関に基づく類推）をたどる際 のポイントにほかならない。「道徳の国が内的自由の共同体と称するならば、国家はその必然な自由の外的形式とし て法的共同体である」（一六九）と言われる通りである。もちろん、この場合の国家は、先の「見えざる教会」と同様に、 アプリオリな原理に基づく一つの理念であり、国家の法律は、一人の恣意が他人の恣意と調和しうるための諸制約の総体にほかならない。南原は、道徳という内的論理がその外的な実現として教会と国家という外的理念を要求するという点において、カント哲学の全貌を捉えようとしているのである。

「カントにおいては道徳を中心として、一方は宗教に導き、他方は法律に連なり、かようにして『宗教の国』と『法 律の国』とは『道徳の国』を境として、互いに接合する。」（一七〇）

このようなカント解釈は、後の価値並行論の核心点を実質的に提示したものと言える。というのも、カントの批判 哲学が真善美の各文化価値をそれらの各領域に固有な価値原理として定立するものであり、そこに「宗教・道徳および政治の各領域における文化の価値の自律とその相関関係の思想」（一七一）が見出されるのは、価値並行論の基本 構想そのものだからである。

『国家と宗教』では、この道徳と政治との内的外的の相関関係が、具体的には、次のようにまとめられている。『実 践理性批判』においては、徳と幸福との原理が構成する実践理性の「二律背反」が、霊魂の不滅と神の存在の要請に基づく最高善の理念によって解決されたわけであるが、それに対応して、政治哲学には、正義という形式的原理と福 祉・安寧という実質的原理の二律背反が存在し、これを解決するのが「永久平和」の理念である（一八二）、と。

この道徳・政治・宗教の価値論的な相関関係論は、価値並行論の原型と言うべきもので

あるが、『国家と宗教』の 補論で論じられるように、それは新しい形而上学の基礎を必要とする。南原は、この形而上学構想について、ヴィンデルバンドやリッケルトの西南学派やトレルチらに念頭においていたことがわかるが（三九七)、南原自身はこの構 想の実現に着手することはなく、それに伴って、価値並行論もいわばスケッチ的な叙述にとどまることになった。本論文の注（２）でも指摘したように、この点で南原は政治哲学者というよりも、政治思想史家と評すべきだろう。

以上のように、南原の価値並行論は、カント哲学に基づいて提示されたものであるが、それは同時にキリスト教と緊密に関係づけられており、それがいわば南原哲学の深みを成している。『国家と宗教』におけるヨーロッパ精神史は、
初期キリスト教、宗教改革、無教会という宗教思想ラインが、プラトン、カントの哲学思想ラインと交差する仕方で、国家と宗教との関係を歴史的に描き出しているのである。したがって、以下において、この宗教思想の原点に位置づ けられるイエスと初期キリスト教についての南原の理解と、価値並行論との関わりを確認しておきたい。

価値並行論では、真善美とともに政治的価値である正義が相互に還元不可能な固有の価値領域を形成しているのに 対して、宗教的価値としての聖は、ほかの諸価値によって構成される価値の平面（＝文化）上に位置する一価値としてではなく、価値の平面の超越（高さ）あるいは深みとして位置づけられている。この点は、これまで見てきたカン ト解釈（『国家と宗教』第三章）の文脈よりも、むしろイエスと初期キリスト教についての議論（第二章）から読み 取ることができるであろう。

まず南原は、キリスト教の中心メッセージを、「神の国」において、特にアリストテレス以降のギリシャ哲学の展 開における「形而上学的ないし神秘主義的宗教」と対比することによって、その特徴を明らかにしようとする。これらギリシャの宗教が「少数者の精神的貴族主義」というべきものであったのに対して、キリスト教の神の国の宣教に おける救済は、神の側からの絶対的な恩恵として到来し人間に求められるのは純粋な信仰である点で、画期的な意義 を有していた。

「プラトンにも見られるような、仮相の世界からイデアの世界へ上昇するかのごとき形而上学的解脱ではなく」（八五)、「悩める者・虐げられる者にとって真の『福音』であり、あたかも当時、ギリシャ・ローマ文化の潮流に打ちひしがれ抑圧されていた一般民衆にとっていかに大なる『革命』であったかは、われわれの容易に首肯し 得るところである。」（八六）

この主張は、キリスト教が心の内面性、純粋さを基礎として、自由な個性、新しい人格概念を核心とするというこ とを意味する。つまり、イエスと初期キリスト教は、いわば絶対的個人主義という基本的な特徴を有しており､その点で基本的に非政治的なのである。しかし、「神の国」における「国」という表現からもわかるように、キリスト教 の個人主義は、他者から切り離され孤立した個なのではなく、むしろ「神の愛によって結ばれる、絶対的な新しい社 会共同体の理想」を可能にする人格的な個を主張するものである。このようにして成立する「愛の共同体」は、「神 を中心としてついにすべての民族・全人類にまで及び得る『普遍主義』」（八八）を特質としており、南原は、キリス ト教を絶対的個人主義（自由）と絶対的普遍主義（平等）という二つの宗教理念の「綜合」として捉えているのであ る（一三〇)。

以上の南原における「神の国」理解は、南原が『国家と宗教』のもとになった諸論考を執筆した当時（一九二〇年代から三〇年代）の新約聖書学や初期キリスト教研究に依拠したものであり、注には、トレルチ『社会教説』、ハルナック『キリスト教の本質』の書名が見られる。特に、絶対的個人主義と絶対的普遍主義という表現はトレルチにおいて確認することが可能であって、これは南原とトレルチの関わりの一端と言える。また、南原の「神の国」は福音書に基づくものであり、アウグスティヌスの「神の国」については、『国

家と宗教』全体でも、それほど立ち 入った議論は見られない。初期キリスト教から中世カトリック主義へ議論を進める中で、アウグスティヌスは、「神の国」と「地の国」との関係についての一頁に満たない扱いにとどまる。むしろ、目立つのは、イエス・初期キリス ト教、宗教改革、無教会主義という思想系譜であり、南原のヨーロッパ精神史理解は、哲学的思想史的考察に基づく ものであっても、南原の信仰的な立場と無関係とは言えないであろう。特に、第二章におけるキリスト教の叙述において、中世あるいは教会に対する批判はきわめて明確である。

では、以上のキリスト教理解と価値並行論とはどのような関わりにあるのだろうか。もちろん、『国家と宗教』の キリスト教理解に価値並行論そのものを求めることはできないが、価値並行論における宗教と相互に並行する文化的諸価値（真、善、美、正義）との関係づけが、イエス・初期キリスト教から宗教改革、そして無教会主義へと通底する宗教理解に合致することは注目に値するものと言える。それは、文化に対する宗教の、特にキリスト教の超越性の議論である。

一方で、「イエスの宗教は道徳的人格価値からの超越であったと同様に、また実に政治的社会的価値からの超越で もあったのである」（一〇〇）。宗教は文化的諸価値の地平を超えており、「国家共同体はもはやそれ自身最高の価値を有するものではなく、最高の規範は政治的国家生活を超えて存する」（一〇一）。しかし、他方、「それにもかかわらず、かかる宗教の超越性は、この世の現実の営みと結合とを否定するものではない。何となれば、宗教は自ら固有の文化 領域を形成するものではなく、自ら文化の価値を超出するものであるが故にこそ、かえってもろもろの文化領域の中に入り込み、これに新たな内容と生命を供し得る」（一三一）。こうして描かれた宗教と文化的諸価値との関係は、南 原の価値並行論の核心を成しており、それはカント哲学の議論から展開されたものというよりも、南原のキリスト教 理解に根拠を有するものと解するのが適当であろう。カント哲学の展開という線上に、価値並行論を位置づけること には限界がある。

もちろん、このような宗教の超越性理解は、宗教による文化の統制を正当化するものではなく、むしろ、価値並行論は宗教に対する文化的諸価値の固有性を擁護することをめざしている。これは、カント的な自律の立場を堅持するということであり、ここから、南原は中世の教会概念を批判することができたのである。

「プラトン国家の中核である哲人政治の理想政治が、いかにローマ法王の教会政治と相通ずるものがあるかは、 極めて興味ある問題でなければならぬ。・・・その場合、宗教と道徳のみならず、学問と芸術に至るまで、一切 の文化がかような絶対的権威のいかに厳格な統制のもとに立たしめられたか。」（一一一｜一一二）

以上、本章では南原の政治哲学の基礎をなす価値並行論について、カント哲学の展開とキリスト教理解の展開とい う二つの議論を辿ることによって、いわばこれら二つの思想系譜が交差するところに価値並行論が位置することを確認した。これらのそれぞれは、南原独自の哲学的思索の構築物というよりも、南原は自らが依拠する豊かな思想世界 からヨーロッパ精神の特質を的確に描き出したと言うべきであろう。しかし、このことは、南原の思想家としての独 自性を否定するものではない。たとえば、南原のカント解釈は、カントの国家論を国際政治論への展開することによっ て、カントにおいては追求されずに残された問題の解明をめざし、カントを超えて大胆な理論展開を試みているのである。それは、「民族個性国家の本源的価値を承認し、その相互の協同によって国家的秩序を超えての、世界に新しい秩序」の創造をめざし、「諸民族共同社会の普遍的秩序」（二〇〇）を建設するという近代の国民国家についての 議論の中に見ることが可能であり、そこに、南原が自らの生きた時代の問題に対して正面から向き合っていることを 確認できるのである。そして、これが次章において取り組むべきテーマにほかならない。